

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

生命をつなぐ融合：機関研究：  
「包摂と自律の人間学」領域 ケアと育みの人類学  
(2011-2013)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-10-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鈴木, 七美 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/5807">http://hdl.handle.net/10502/5807</a>

機関研究 ● 「包摂と自律の人間学」領域  
ケアと育みの人類学 (2011-2013)

プロジェクト「ケアと育みの人類学」は、少子高齢化が進行する社会で検討すべき分野として注目される「ケア」や「育てる」ということについて、資料の分析を通してそれらの意味を問い直すと共に、実践に向けた具体的素材を提示することを目的としている。その際、共通点として重要視している観点は、いずれも、生命をつなぐ「養生」の多様なあり方である。

## ケアと専門職化における課題

「ケア」という言葉が1970年代以降急速に使われるようになったことは、時代の変動の中で、解決しきれない課題に対し人々が抱く不安感や対処の軌跡を背景としていることを示唆している。高齢期ケアへの注目は少子高齢化する社会の到来という現状認識、様々な心の問題に関するケアは、PTSD(心的外傷後ストレス障害)など心の病の原因と治療法の開発やコミュニケーション方法の多様化などを背景としている。いずれにしても、専門的知識を備える専門職者の活動が期待されてきた。

とはいえ、高齢者の生活支援の現場で働くケアワーカーに関する現地調査から見てきたことは、専門的知識に基づき、システムの中で行うケアでは、高齢者の生活充足には十分ではないことである。例えば、スイスにおける在宅ケア「シュピテクス」では、一種の保険をベースとして、生活支援が必要な人に対し買い物、料理の手伝い、掃除など、自宅で暮らすことができる支援を提供している。だが、できた食事を共に食べ会話することはこのケアには含まれていない。同様に、日本でも、自宅で生活を続ける要支援の高齢者に対して、支援の必要性の程度に応じてホームヘルプが行われるが、やはりここでも、決められた支援以外の共に食べることや楽しむことは、ヘルプの範疇には入っていない。生活支援が必要な人が自宅で独居する場合、コミュニケーションの機会は多くはなく、様々な活動を求める人々の希望は、弱いところを補



生活支援付き高齢者対象住居施設でキルト作りをする女性 (2008年11月、ペンシルヴェニア州リティッツ)。

うという考え方で開発された専門的なケアだけでは、充足することは困難である。介護保険制度の対象となっている生活支援に関する専門的ケアとそれ以外のケアの融合、そしてそれがどのような展開を見せるものなのかが課題となっている。

## ケアの在処—キルト作り

そうしたことを考える私がアメリカ、ペンシルヴェニア州での現地調査で出会ったケアの場の1つは、キルト作りの空間である。第1の場は、高齢者が安心して暮らせる場所として訪ねた生活支援付き住居施設(アシスティッド・リビング)である。施設の入り口近くにキルト・スペースが設けられており、そこで高齢者が熱心にキルティングをしていた。

キルトは、表布、中綿、裏布を縫い合わせたもので、ベッドカバー、コンフォータ(掛け布団)、防寒具として利用されてきた。アメリカ合衆国では、特に、端切れを縫い合わせて表布を作るパッチワーク・キルトが人気を集めてきた。新しい生活の場を求めて移動する人々が、使用した布の端切れを利用しつつデザインを考案し楽しみながら作品を生み出すことは、「もったいないの文化」として続けられてきたのである。小さな端切れを縫い合わせる作業は、1人でこつこつとどこでも行うことができる。だが、表布、中綿、裏布の3層を合わせる仕上げの作業は、キルトフレームを用いて行う大作業となるため、しばしば何人もの人々が集まって行うミーティングの機会を生み出してきた。

人々が生活の中で習慣のように行ってきたことを生活支援が必要となっても続けられるように、前述のアシスティッド・リビングには、キルト専用の部屋が設けられている。このスペースは、体力を維持するためのトレーニングルームや、趣味の工作ルーム、ミニコンサートを行うイベントルームと同様に、高齢者が希望する活動に資すると考えられている。キルトに関し、高齢者が感じる喜びは、年を重ねても以前と



困窮者への支援を行う目的でファンドレイジング用キルトを作成するキリスト教再洗礼派メノナイトの女性たち (2011年9月、ペンシルヴェニア州アクロン)。

同じように被災地へ送る支援品製作に参加できること、端切れの組み合わせから美しいものを考案すること、一針一針縫うことの気持ちよさ、誰にも遠慮のいらぬ場としてのキルト・スペースに居場所があること、通りかかる人々と一緒にキルトを作成する人たちと交流できることなど、様々な要素から構成されているだろう。個々人の感じ方を個別に詳しく解明することはできないが、キルト・スペースは不可欠のものとなりに人々に了解されている。

### キルトと夜なべ

キルト・スペースとケアについて考える第2のきっかけは、2011年秋にアメリカ、ペンシルヴェニア州アーミッシュの家庭を訪ねたことである。表のドアを開けると、そこは居間となっており、家族の数とそれより少し多いロッキングチェアが並ぶ。ドアの右手にキッチンがあり、その前にはテーブルが置かれて、ダイニングとなっている。部屋の中に仕切りはなく、訪問者はいつも、この多目的な部屋に迎え入れられる。表ドアのちょうど反対側に、庭に通じる裏のドアがある。そのすぐ前に、キルトフレームが据えられている。このフレームは、この家族と同居している若い女性が主に使っている。彼女は、自分の家族の中では、気持ちが不安定となるため、この家庭に預けられ過ぎていた。誰ともほとんど言葉を交わさない日もあるが、訪問者が来る日にも食事を共にし、家事を手伝っている。その他の時間は、販売用のキルトを作っている。通りを行く人々や馬車が見える太陽光豊かな窓辺で、彼女は静かに針を運ぶ。キルト・スペースは、調子のよい日もそうでない日も気兼ねなく座れる彼女の場所になっている。

アーミッシュは、家族揃って夕食を食べるが、その後は、夜なべの時間だ。テレビなどの通信器具は認められていないので、家族それぞれがお気に入りの作業をする。妻のNは、しばしば父親の夜なべを手伝う。父親は、雨の日に馬の背にかける防水布の端切れを利用して、文房具入れの袋を作っている。これらは、メノナイト・セントラル・コミッティーを通して、発展途上国の子どもたちに送られるものである。父親は、今では視力が落ちて、縫い物はほとんどできないが、Nに手伝ってもらって最後の紐を通して袋作りの仕上げをするのである。アーミッシュの親世代は一般に、仕事の第一線を離れると別棟（ドレーディ・ハウス）を同一敷地内に建てて引退するが、子どもたち世代と毎日のように交流がある。夫のSは、夜なべの時間に、雑誌や手紙を読みあげたり、内容への感想を述べたりして、作業する人たちに情報を提供する。ロッキングチェアを揺らしながら過ごす時間は、何をしてもよいのだが、毎夜、語りあいながら少しずつ作業が続けられる。

### 専門性と日常生活の融合

生活支援を必要とする高齢者や心を病む人に対する、専門職者による支援や治療に包括されない部分のケアについては、家族だけにとどまらない人々により、共に過ごす場を設けて行われている。

アーミッシュの場合でも、心の病に関しては、近年、例外的に専門的施設における治療が行われるようになってきている。これらの施設で行われる治療やアクティビティの中には、各家庭で暮らすだけでは達成できない内容も含まれるからである。インディアナ州の施設は、そうした場所だ。家族で暮らすこ

とを重視しているアーミッシュだが、特に、心の病をもつ若い世代に関しては、遠くからここに入所してくる者もいる。

そもそもこの施設は、キリスト教再洗礼派の信教に基づき、良心的兵役拒否を行ってきた信者が、代替活動として病院やケア施設で活動した経験を生かして、開発してきたものである。アーミッシュの文化に配慮して、施設の中にアーミッシュが過ごす場を特設している。さらに、家族を重視するアーミッシュのために、敷地内に、家族と共に生活しながら療養できる家を設けるという工夫をしている。専門職者によるケアと家族の日常生活が融合したセッティングを模索してきたのである。子どもたちは、家族と離ればなれになることなく、この施設で、治療、運動、学習を続けることができる。

### 解決し切れない問題を抱えつつ生きる人々

時と共に体力が落ちてゆく高齢者、「全快」という状態を判定するのが困難な子どもたちの心の病、そうした人々が満足や幸福感を得るためには、暮らす場所や関係性のあり方を、その時々模索してゆくほかはない。そうした意味の時空間の開発は、マニュアルにそった専門的ケアだけで達成できるわけではない。様々な世界に縁のある人々の知恵を集めて行う必要がある。また、そうした工夫によって生み出される経験は、一方的に誰かを支えるのみならず、多くの人々が生活の場を得て楽しむ思いがけない新しい場所の構想に繋がるかもしれない。

プロジェクト「ケアと育みの人類学」は、生きることにに関する知識と経験の融合に向けた考え方と実践について、現地調査に基づき下記の中心的シンポジウムを実施した。



家の外部に仕事用電話室が設けられたオールドオーダー・アーミッシュの家（2011年9月、ペンシルヴェニア州ギャップ）。

### 2011年度

- ・インクルーシブ・デザインとは何か（企画：野林厚志・平井康之）
- ・包摂した社会空間の実現にむけて（企画：野林厚志・平井康之）
- ・エイジング—多彩な文化を生きる（企画：鈴木七美他）

### 2012年度

- ・グローバル化における紛争と宗教的社会運動（企画：丹羽典生）

### 2013年度

- ・Social Movements and the Production of Knowledge: Politics, Identity and Social Change in East Asia（企画：平井京之介）
- ・高齢期のウェルビーイングと多様な住まい方（企画：鈴木七美）

これらのシンポジウムなどを通して、成果を発信中である。

### すずき ななみ

国立民族学博物館先端人類科学研究部教授。専門は文化人類学・医療社会史。著書に『出産の歴史人類学』（新曜社 1997年）、『癒しの歴史人類学』（世界思想社 2002年）、編著書に『The Anthropology of Aging and Well-being: Searching for the Space and Time to Cultivate Life Together (Senri Ethnological Studies 80) (National Museum of Ethnology 2013)』。